

# 加賀・能登における古代末～中世前半期の墓地と墓標

安中 哲徳（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

**墓標と記年銘資料** 古代～中世にかけての墓の形状は、『餓鬼草紙』に見える高塚で周りに石を積んだ墳丘墓がイメージできるが、実際には墳丘の有無、周溝（区画溝）の有無、配石（集石）・区画石の有無などの各要素と、上に墓標（石塔）、下に蔵骨器や土器棺を持つかどうか、火葬か土葬かなどが組み合うとさらに複雑な状況を呈しており、完全には整理できていない状況にある。

古代の墓制については、古代前半に見られた火葬骨を蔵骨器に埋納した土坑墓が輪島市道下元町遺跡や小松市河田山古墳群などで見られるが、火葬はまだ一般化しておらず普及はしていない。

県内の石塔類には、五輪塔や宝篋印塔、板碑、層塔などがあり、本来は供養塔の意味で建てられていたものが、14世紀後半以降、墓標として変化してきたとされている。記年銘を持つ石塔類の中で最古の事例は、羽咋市福水朝日山遺跡の弘安二年（1279）銘を持つ自然石板碑で、13世紀代を中心とする7基の礎を伴う墳丘墓から珠洲焼壺や片口鉢、土師器皿が出土している。福水寺住職の墓とされており、板碑は門弟等が造立したものと考えられている。また、珠洲市法住寺墓地では、元久元年（1204）銘を持つ経筒外容器が出土しており、経塚が造られた後、珠洲焼甕棺墓の土葬墓と珠洲焼の蔵骨器を持つ火葬墓とが混在する集団墓地へ変遷することがわかる。能登町明泉寺鎌倉屋敷の集団墓地内では、永享三年（1431）八月廿七日銘五輪塔地輪が確認されており、塔下から珠洲焼四耳壺の蔵骨器が出土している。周囲に積み直された石塔も多く、五輪塔と蔵骨器の同時性には検討も要すが、珠洲焼編年の基準資料となっている。県内最古の五輪塔には加賀市薬王院塔や能登町最安寺塔が位置づけられ、14世紀前半の造立とされている。

**加賀型宝塔** 古くから五輪塔の火輪とされてきたもの一群に、頂部に反花装飾を持つ一群があることが知られていたが、能美市宮竹墓谷中世墓群の調査で相輪と一体的に出土したことにより、宝塔の笠であることが明らかとなった。その後、金沢市史編纂による金沢市普正寺遺跡の実測調査により、第3号塔が完形の宝塔に復元されている。形状は、基礎・塔身は五輪塔の地輪・水輪と同一形態であり、単独では判別困難である。笠は頂部に反花装飾を持ち、下方に沈線を巡らせる。反花を伏鉢、沈線を露盤に対比できる相輪は、上から宝珠・水煙・反花・五輪・請花を持ち、笠と組合わすことで五輪塔・宝篋印塔と区別することが可能である。石材は、緑灰色を呈する凝灰岩が多く、産出地に小松市南部の滝ヶ原町周辺が、凝灰質砂岩のものは小松市北部丘陵と想定されているものもある。分布は、北は津幡町から南は加賀市までの加賀地方を中心に確認されているが、宝達志水町や富山市での確認例もある。時期は、14世紀後半～15世紀前半を中心に造立されており、時期が降るにつれ反花と沈線の省略化が見られる。また、意図的な破綻行為による廃棄や他に転用される例が、能美市宮竹墓谷中世墓や金沢市額谷遺跡、小松市八里向山H遺跡などで見られる。三浦純夫氏による越前式装飾を持つ宝塔の検討により、これら特徴を持つ宝塔は、円山塔に代表される越前嶺北の宝塔に源流を置き、14世紀第4四半期に出現することが明らかとなっており、今回改めて加賀型宝塔として提示したい。

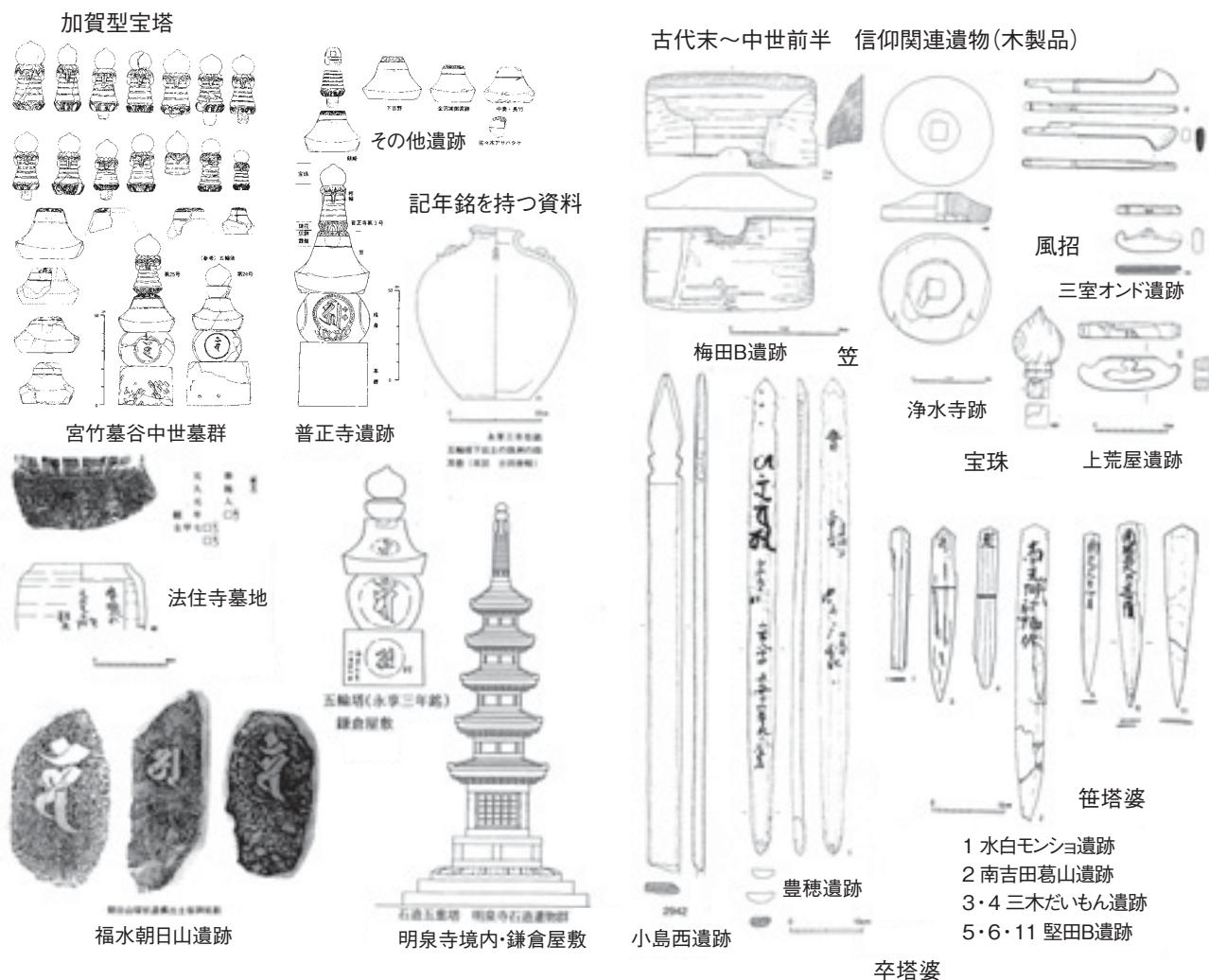
**信仰関連遺物** 古代～中世の墓標・信仰関連遺物と考えられる木製品の中で、珠洲市野々江本江寺遺跡出土の大型木製板碑や笠塔婆など全形を復元できる類例は他に見ることができない。

笠塔婆の笠形木製品が金沢市梅田B遺跡や小松市浄水寺跡などから出土し、小松市浄水寺跡からは笠塔婆の宝珠の可能性がある木製品が出土している。

七尾市三室オンド遺跡からは、長野県千曲市社宮司遺跡出土木造六角宝幢に類似する11世紀前半の風招型木製品が出土している。他に、金沢市上荒屋遺跡出土例も風招の可能性がある。

七尾市小島西遺跡では11世紀末～12世紀の卒塔婆が、金沢市豊穂遺跡でも頭部が五輪塔形で、永和元年（1375）銘墨書を持つ卒塔婆が出土しており、柿経写経供養に関連することが明らかとなった。

笛塔婆は、中能登町水白モンショ遺跡や宝達志水町南吉田葛山遺跡、金沢市堅田B遺跡などから出土している。木製遺物の場合、川跡や溝、鞍部などからの出事事例が多く、墓標として実際に墓で使用されていたか不明であり、意図的な廃棄行為や信仰・祭祀行為などに伴う可能性も考えられる。



**墓地と石塔の変遷 加賀** 平野部では屋敷墓が12世紀の白山市中村ゴウデン遺跡や13世紀の加賀市三木だいもん遺跡の土葬木棺墓（単独墓）に確認できる。北頭位で北側に副葬品がある点が共通し、領主層クラスの屋敷墓と位置付けられている。白山市白山町遺跡・白山町墳墓遺跡では、13世紀前半の土葬土坑墓・配石墓から、14世紀後半～16世紀前半に造営された方形区画の火葬配石墓へと変遷する。土葬土坑墓上からは五輪塔地輪が現位置を保ち出土している。小松市牧口中世墓地は畿内周辺から搬入された五輪塔を持つ単独の墳丘墓で、下部の切石組石室内に加賀焼甕棺を持つ土葬墓である。

火葬墓は13世紀前半から認められ、能美市湯屋チョウヅカ遺跡や小松市八里向山F・H遺跡など焼土坑墓や土坑上に盛土した墳丘墓が出現し、蔵骨器に火葬骨を埋納する例も見られるようになる。14世紀に入ると小松市軽海中世墓群や八里向山H遺跡円形や方形の配石墓群が認められ、五輪塔等の石塔が造立されるようになるなど、火葬文化の広がりが見られる。14世紀後半以降、配石墓群は急増し、金沢市普正寺遺跡の五輪塔や宝篋印塔・加賀型宝塔・板碑など石塔類も増加し、追善供養

に伴う造立の増加が確認できる。また、白山市劍崎遺跡や金沢市額谷遺跡の方形周溝墓・区画溝墓の出現など埋葬形態も多様化する。他に、経塚の周辺に一定期間置いてから火葬墓が造営される例が、能美市宮竹墓谷中世墓群や金沢市小坂1号墳々頂経塚・中世墓地で認められる。

地下式壙、地下式横穴墓は津幡町刈安野々宮遺跡や加賀市敷地天神山遺跡群など15世紀後半以降に見られるが、中世前半には出現していない。僧侶の修行窟や入定窟と考えられている。

**能登** 経塚の周辺に一定期間置いてから墓地を造営する例が珠洲市法住寺墓地で見られ、元久元年（1204）銘を持つ経筒外容器が出土している。14世紀前半～15世紀前半には土葬の甕棺墓の土坑墓から蔵骨器を持つ火葬墓への変遷が想定されており、五輪塔や宝篋印塔などの石塔が集積されている。羽咋市福水朝日山遺跡では、土葬木棺墓上に墳丘墓を造り、隅に県内最古の弘安二年（1279）銘を持つ自然石板碑が置かれている。13世紀～14世紀前半にかけての墳丘墓が隣接して造営されており、焼土坑や蔵骨器、火葬骨が出土していることから、土葬から火葬への変遷が見られる。七尾市細口源田山遺跡では、14世紀後半以降の木棺墓・甕棺墓の土葬墓から15世紀前半以降、配石墓や火葬骨埋納ピットなどの蔵骨器を持つ火葬墓へと変遷し、五輪塔も造立されるようになる。

加賀同様、火葬墓は13世紀代の墳丘墓で出現し、14世紀後半以降、石塔、蔵骨器を持つ配石墓が増加するが、能登では方形周溝墓は確認されていない。能登町明泉寺境内・鎌倉屋敷では、五輪塔や宝篋印塔が源頼朝の墓と伝承される大型の宝篋印塔を中心に集められている。14世紀～15世紀の火葬墓の集団墓地とされ、永享三年（1431）銘を持つ五輪塔地輪の下から珠洲焼四耳壺の蔵骨器が出土している。七尾市三引遺跡は、14世紀～15世紀代に配石墓と土抗墓が造営され、蔵骨器が出土している。石造物は後出的な墓に伴うとの指摘があるが、塚には杉が神木として祀られており、当時から墳墓の標識となっていた可能性がある。七尾市中笠師中世墓群では、14世紀後半～16世紀前半の配石墓を検出している。内部に蔵骨器、火葬骨ブロックを持ち、上部に五輪塔と板碑を確認している。

#### 能登町五十里洞穴

中世墓や志賀町地頭町中世墳墓窟などの墳墓窟が14世紀代に見られる。上部に五輪塔や宝篋印塔、板碑が置かれ、下部から蔵骨器や火葬骨が出土している。石塔の組合せがわかる好例である。奥壁の鉄釘や棒を渡していた可能性がある側壁に掘られた穴には、懸仏や位牌がかけられていた可能性が指摘されており、興味深い。

加賀・能登の中世墓 属性別変遷表

		11C	12C	13C	14C	15C	16C
		前	後	前	後	前	後
加賀	経塚			---			
	墳丘墓			火葬	---		
	周溝墓				火葬	---	
	配石墓			火葬	---		
	土坑墓			上:土葬,下:火葬		---	
	木棺墓			土葬	---		
	甕棺墓			土葬	---		
	墳墓窟			火葬	---		
	地下式壙					土葬	
	屋敷墓			土葬	---		
	石塔				---		
	木製塔婆				---		
	蔵骨器						
能登	土葬墓			土葬	---		
	火葬墓			火葬	---		
	経塚			---			
	墳丘墓			火葬	---		
	周溝墓				火葬	---	
	配石墓			火葬	---		
	土坑墓			上:土葬,下:火葬	---		
	木棺墓			土葬	---		
	甕棺墓			土葬	---		
	墳墓窟			火葬	---		
	地下式壙						
	屋敷墓						
	石塔				---		
	木製塔婆			---			
	蔵骨器						
	土葬墓			土葬	---		
	火葬墓			火葬	---		